

住まいと暮らしのデザインブック

住まいのnet信州

SUMAI-NET SHINSHU

VOL. 21
2013
Autumn & Winter

特集

いま、平屋がおもしろい!
ONE STORY HOUSE



誌上で完成見学会

住宅建築実例集

500(税別)
YEN



Chapter 1 JOHNSON TOWN

(埼玉県入間市)

いま、平屋の暮らしが見直されています。

若く瑞々しい感性で新たな命を吹き込まれ、引き継がれたもの
建築の可能性を追求して作り出されたものなど

自然と調和しながら心地よく暮らす県内外の事例をご紹介します。

平屋暮らしの多彩な魅力と、これからの住まい方について考えます。



Chapter 2 信州の平屋 (P160~)

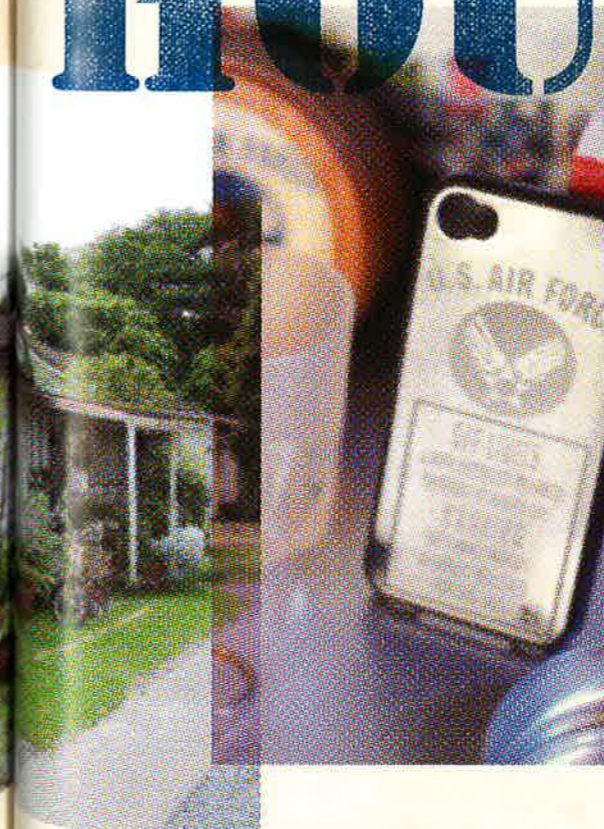
ONE STORY HOUSE SPECIAL



特集

いま、平屋がおもしろい!

A one story house is interesting now!



よその住宅地であれば浮いてしまいそうなオシャレな看板やディスプレイも、この街並みには自然と溶け込む。ハウスは買主だが、管理会社の了承を得られればセルフビルドのリフォームやリメイクも自由という点が暮らしを積極的に楽しみたいという人たちに人気の理由の一つ。



通りを挟んで右側の瓦葺きの平屋が60年前に建てられた「米軍ハウス」。外観はほぼ当時のまま、内部の水周りなどはリフォームされている。左側が新築の「平成ハウス」。床暖房を入れたり、気密性やセキュリティ面など現代生活に則して快適性を高めたロフト付き住宅。それぞれの利点を踏まえて選ぶことができる。

いま、平屋が面白い!
ONE STORY HOUSE SPECIAL



この町では流れる空気までがヴィンテージ

敷地に足を踏み入れた途端に流れる空気が変わった。ブルーインパルスの航空ジョーイで有名な埼玉県入間基地に程近い住宅地。基地がかつて米軍の「JOHNSON AIR BASE」として接収されていた頃に、軍人のための家族住宅として建てられた「米軍ハウス」が今なお多く現存している。

真っ白な外壁、英字の標識やサイン、美しく手入れされた庭、ウッドデッキや垣根のないオープンなポーチ。すべてがまるで懐かしいアメリカ映画の世界そのもの。とはいえここ「ジョンソンタウン」は、テーマパークでもモデルハウスでもない。既

存の「米軍ハウス」棟と、雰囲気を受け継ぎながらも現代の建築基準に合うよう建てられた「平成ハウス」の約80棟（130世帯）がほぼすべて賃貸契約済みで空き待ち状態という人気の街なのだ。数年前からは店舗兼住宅として借りる人が増え、街はいつそう暮らしの場として活気を見せている。

都心のマンションや一般的な戸建住宅では得られない「何か」を求めて平屋での暮らしを選択した人たちが、便利さや広い空間の代わりに彼らが望んだものとは何なのか？ その答えを求めて二組の住まいを訪ねた。



ここジョンソンタウンが人気を集める理由の一つに、統一感のある街並みがある。「景観を維持するために住民にはいくつかのルールや決まり事がありますが、そのことが逆に住民の連帯意識につながりコミュニティが育まれます」とオーナーの磯野達雄さん。また、敷地の周りには公園や学校も多く、オープンな環境のなか子育てもしやすい。一度入居すると長く借り続けるケースが多いのも頷ける。

Chapter 1 JOHNSON TOWN

平屋ブームの火付け役。
それは「米軍ハウス」から始まった

平屋に暮らしたい——。そう考える人の多くが一度は憧れる「米軍ハウス」。戦後、駐在米軍兵士のための住宅として建てられたフラットハウスは、引き上げとともに多くが空き家に。1970年代、アーティストらがアトリエとして活用したのに続き、ここ数年の平屋人気を牽引するよう再び注目を集めている。

取材協力：磯野商會



History



昭和10年代、旧日本軍航空士官学校（現入間基地）の営外住宅として日本家屋60棟ほどが建てられた。終戦後、基地が米軍占領下となり、米兵のための簡易住宅（＝米軍ハウス）に建て替えられた。朝鮮戦争停戦後、米兵の引き上げとともに多くは空き家に。平成に入り、土地を管理する「磯野商會」を引き継いだ磯野達雄さんにより建物の改修や環境整備が進められ、賃貸形式でテナントを募集。現在では半数が店舗兼住宅として人気を集め、常に95%が稼働している。

気持ちまで開放的に。 時間が緩やかに流れる家

TANAKA HOUSE

家も遊び道具の一つ。どうせ住むならこれくらいこだわって楽しみたい。米軍ハウスの面白みをとことん味わうOnly one style!



埼玉県内の会社に勤務するご主人と奥様。「休日も外へ出かけずこの家で過ごす時間が多し」と平屋の暮らしに大満足。

タウンの中でも奥まった静かな一画に建つ米軍ハウス。パラがアーチをつくるアプローチの向こうに玄関を兼ねたオープンデッキ。建築当時のままのスタイルを残す横板下見張りの白い外壁に、エクステリアのどこどこに塗られた水色のペンキがよく似合う。

囲まれていると落ち着くと話すご主人にとっては、まさに暮らすならここしかないという運命的な出会い！ 便利な都内のマンションを引き払い、奥様と猫とともに引っ越して来た。このハウスNo.1122の住宅。実は、アメリカの隊員たちが実際に暮らした様子を知ることができる貴重な写真（写真11）にも遺された歴史的な建物など、60余年にわたる米軍ハウスを巡る物語がここに凝縮されているといっても過言ではない、特別な一棟なのだ。

柵や垣根のないオープンな暮らしがジョンソンタウンの流儀。ご近所との距離が縮まるだけでなく、街全体を自分の家と同じように美しく保つ意識が生まれるようになる。

JOHNSON TOWN



1 リビング・ダイニングを中心に、ベッドルーム、フリースペースやワークスペースがワンフロアで完結する平屋の住まい。こちらの田中さんのお宅は約28坪。 2 コンパクトで使いやすいダイニング・キッチン。普段の軽い食事はここで済ませることが多い。 3 靴脱ぎスペースや上がり櫃といった段差がない所も米軍ハウスらしい。



JOHNSON TOWN



9 田中さんがこの家に住む決め手もなかった、リビングに残る石壁は、かつてこの家の主だったアメリカ人隊員マッグレイン夫妻の記録写真(写真11)にも遺されている。いまその前には、田中さんの手によるさまざまなアートが飾られている。10 テラスとエントランス。扉の外の網戸も古いアメリカ映画に出てきそうな雰囲気。入口の表札や照明は、街全体で統一されて美しく。11 室内でつくるマッグレイン夫妻。夫妻は近年来日した際、ハウスへも再訪し、当時を懐かしみ感激したという。12 内と外をゆるやかにつないでくれるテラス。ここで食事をとることもしよつちゅうだとか。「普通なら通りから見ると食べにくいものですが、ここでは全く自然にできてしまう」と田中さん。フラットな空間は、動線としての行き来しやすさだけでなく、心の垣根も取り払ってしまうのかもしれない。



4 テラス脇の庭に面しているフリースペース。腰高よりも大きな窓からは光や風がたっぷり入ってくる。隣のリビングとはカーテンでゆるりと仕切って。5 ウッディなキッチンには前の住人の方が使っていたものをそのまま使用。カラフルな雑貨小物をさりげなく置いてポップで楽しい雰囲気。6 庭の草陰に置かれたミニチュアの人形や動物は、近所の保育園に通う子どもたちが喜ぶから、と時々配置を変えて遊んでいる。そんなやりとりも微笑ましい。7 空間が細かく仕切られず、天井も高いぶん、室内がとても広く感じられる。天窓があるから、室内はいつも明るい。8 置き型タイプのバスタブに、レトロなシャワーヘッド。ヴィンテージテイストを暮らしの隅々に散りばめて楽しんでいる。

こんな暮らし方もあるよと伝えたい

ここに暮らすようになって気持ちにゆとりがもてるようになったと話す田中さん。「この街には家と家の間仕切りの柵や塀がないでしょう。みんながオープン。ご近所同士も仲良しですよ。窓を開放にしても、庭で食事をしたって気にならない。道行く人と目が合えば挨拶して。暮らし方だけじゃなく、気持ちや性格まで開放的になって、ちよつとしたことは『まあいいか』と笑って許せてしまうんです」

ただ住むだけではもったいないと、週末にはサンドブラストやアートの物づくりのワークショップの場として自宅を開放。訪れる人に街や家を体験してもらうことで、「こんな自由で楽しい暮らしがあるよ、マンションや一般的な戸建てとも違うこんな住まいの選択肢もあるんだよ、と知ってもらいたくて」

最後に平屋の魅力を一言とお願ひすると「空が広い」と答えてくれた田中さん。「朝も夕暮れも、自然と空を見上げるようになりまして。何でかな、ここでは本当に時間がゆっくり過ぎるのを実感できるんですよ」



2



3



4



1 リビングを中心に、個室が2つとバスルームというシンプルな間取り。屋根裏のロフトが収納スペースに。元の雰囲気を生かしながら、建具をペイントしたり小物を加えることで、ハウス独特のシャビー感を引き立てている。2 玄関脇の梯子を日用品の収納ラックに。限られた空間を生かした暮らしのアイデアがあちこちに。3 床板の傷や擦れはあえてそのままに。時を積み重ねてきたものだけがもつ味わいが米軍ハウスの魅力の一つ。4 バスルームには憧れの置き型タイプのバスタブが「ジョンソントウン」の物件では、古い家具や設備も修繕しながら使われ続けているケースが多い。



深い軒のあるデッキ部分を店舗の入口に改装。住宅の入口は建物をくると離れた奥に別にある。手入れの行き届いた植栽が美しい。

JOHNSON TOWN

時を重ねたものだけがもつ 味わいを大切に

TANIFUJI HOUSE

「シンプルで長持ちする上質なものをコンセプトにカフェ兼セレクトショップを営むオーナー。揺るがない物差しがあれば、平屋での暮らしはこんなにスタイリッシュに。



2010年、ジョンソントウン内に移住と同時に、カフェと暮らしの道具の店「facht8 (ファクト)」をオープン。

経年により磨かれた板張りの床には、ところどころにかつて靴履きのスタイルの暮らしが残ったことを物語る傷や擦れの痕が残っている。剥き出しになった梁は、現代住宅のそれと較べると頼りなくも見えるが、戦後の材料不足のなか、当時の大工が慣れない洋式の家づくりに奮闘した様子が垣間見える。

米軍ハウスがもつ、余計な装飾を省いたシンプルで無機質な空間。そこに60年近い年月の間に蓄積された暮らしの痕跡と、いま、新たに住まい手となった谷藤さん夫妻の感性がプラスさ

れ、一足飛びには手に入れない深い趣のある家に仕上がっている。

「古いもの、味わいのあるものに惹かれます」という夫妻。室内のユーズド家具や小物類はほぼもともと持っていたものだが、この部屋に合わせて設えたもののようにしっとり馴染んでいる。

「夏は暑く、冬は寒いなど、古い家なりの不便さはありますが、この建物にはそうしたデメリットを上回る魅力と、これから長く付合っていきたいという期待感があるんです」



5 メインの通りからは細い路地を抜けた先に位置するため、一歩奥まった隠れ家のような趣がある。6 天井を抜いて小屋裏までオープンにした店舗スペース。リフォーム時に造り付けたカウンターの木材は以前デッキで使われていたもの。

フラットハウスの歴史に 新たな1ページが加わった

谷藤さんがジョンソンタウンを選んだ理由。それは店舗兼住宅となる物件を探し求めていたからでもある。

念願のカフェ雑貨ショップを開こうと、地域を絞らずに時間をかけて調べるうち、ある不動産情報サイトでこのエリアのことを知ることになった。

「ちょうど入居者の入れ替わり時期にあわせて大改修をするというお話だったので、リフォームの際、住宅と店舗に分けてもらいました。内装なども、自分たちのリクエストで一から関わることができたので、タイミングがよかったですね」

店舗と住居部分はキッチンを通じて行き来ができるため、小さなお子さんがいるお二人には安心。元の建物のヴィンテージ感は残しつつ、水周りや気密性の高い建具などを新調し、店舗としての快適性もアップ。

穏やかな光が差し込む店内には、二人が集めた暮らしの道具が美しく余白を保ちながら並べられ、お茶や食事を愉しむ人たちが次々と訪れる。歴史ある平屋に、また新たな物語が重ねられようとしている。



7 玄関扉や窓のサッシに塗ったドイツ製の黒いアイアン塗料が硬質でシャープな印象を際立たせる。8 白を基調とした店内で、一面だけグレーに塗られた壁。セレクト商品のなかの粉引の器が映えるように、とのオーナー自身のアイデアから。器も国内作家の作品からフランスのヴィンテージものまで、確かな目で選び抜いたものだけを置いて。9 余計なものを加えずに引き算でまとめあげたインテリアセンスは見事。店舗、住宅、そして暮らし方そのものにまで、自分たちの尺度をしっかりともち、妥協なくより良いものを求めようとする姿勢が反映されている。

JOHNSON TOWN

